



GSEF (グローバル社会的経済協議体) 2023

アフリカ・ダカール大会に向けて

2023年 アフリカ・ダカール大会 3・11 関西プレフォーラム
主催：近畿労働者協同組合 / 大阪労働者協同組合



▲津田直則先生による講演が行われた

3・11 関西プレフォーラム開催

【報告】青藤日出治 (大阪労働者学校・アソシエ工学長)

二〇一四年にソウルでスタートしたグローバル社会的連帯経済フォーラム (GSEF) は、五月にアフリカのダカールで六回目の大会を開催します。

それに先立って関西でプレフォーラムが行われました。

主催したのは、近畿労働者協同組合と大阪労働者学校・アソシエです。

前者は昨年、労働者協同組合の施行にもなっており、後者は二〇一六年に開学され、産別労働組合運動と中小企業の事業協同組合運動との連携を追求する学校です。

この二つの機関が、社会的連帯経済のグローバルな発展をめざす協議体に参加することを通じて、危機に瀕した日本資本主義のオルタナティブな社会経済システムに向けた社会運動を前進させようという結論に至りました。

冒頭あいさつに立った武建一労働者協同組合代表は「イギリス、スペイン、フランス、韓国などの協同組合運動の歴史に学びつつ、この国でも労働者がみずから事業を起し責任ある企業作りを取り組み、産業と社会を担う労働者を育てること、これが労働者協同組合を発展させる力だ」と力強く訴えました。

続いて、アフリカのダカール大会に参加予定の「社会的連帯経済を推進する会」の若森賢明代表から、集団的・持続可能な地域経済を創造するというダカール・フォーラムのテーマと、日本から報告する3つの取組について紹介。

人間らしい働き方のできる協同的な経済の構築、持続可能な海洋経済 (漁業) の創出、地域の食糧自給体制の推進といった各テーマが紹介され、日本からは、岩手県重茂漁協、山形県庄内町の食料自給ネットワーク、ワーカーズコレクティブの就労支援の取組みが報告されることとです。(※別掲資料)

最後に、大阪労働者学校・アソシエの講師津田直則さんからダカール大会の意義について、「自身の社会的連帯経済に関するライフワーク研究に基づいた講演が行われました。

津田さんは、営利や競争を原理とする資本主義システムが人間性と地球環境に深い危機を引き起こしている現状を批判され、そのオルタナティブとして連帯を原理とする社会経済システムを提言され、その具体的な方策として、株式会社の労働者協同組合への転換、協同組合の拡充と国際ネットワークの発展、社会的連帯経済研究に取り組む研究者相互の交流の推進などを訴えられました。

グローバル資本主義が耐えがたいほどの深刻な不平等と格差を生み出し、自然の生態系に対して壊滅的な打撃を加えているこの世界の苦境から脱する道筋をわたしたち自身で探り当てていかなければなりません。

さらに、この一年のあいだ、ウクライナでの戦争が世界規模での核戦争へと拡大していく脅威に直面して、わたしたちはこの転換を喫緊の課題とするようになっていきます。

このプレフォーラムはその課題への取り組みを前に進める確かな手ごたえを感じさせてくれる集会でした。

【別掲資料】

人間らしい働き方と持続可能経済のための公共政策 ブルーエコノミー (海洋経済) とグリーン経済への関心



テーマ1 / 若者と女性のためのディーセント・ジョブ (人間らしい働き方) 協働的で持続可能な経済のための公共政策の共同構築

SSEは、発展途上国でも先進国でも、地域開発を行う効果的かつ協働的な方法として広く認識されるようになってきている。

ではどのように課題や問題を特定し、公共政策のための条件と機会を作り出し、私たちの地域のための協働的で持続可能な経済に貢献したらいいのか？

インフォーマル経済から、若者や女性のためのディーセント・ジョブを創出する協働的で持続可能な経済への移行に、どの様に橋渡ししたらいいのか？

地域に密着した経済を促進し、包摂的で持続可能な開発を実現するために、自治体やSSE関係者はどのような役割を果たすべきなのかを各地実践から共有し構築する。

サブテーマ

1-1 / ディーセントな雇用を促進するための政策計画、実践の共同構築

1-2 / 協働的で持続可能な経済への移行に役立つインフォーマル経済のきっかけと経験

1-3 / 社会的連帯経済組織および企業のカバナンス

テーマ2 / 持続可能なブルーエコノミー (海洋経済)

伝統的な漁業の維持、持続可能な新規雇用の創出、

地域に密着した経済を促進し、包摂的で持続可能な開発を実現するために、自治体やSSE関係者はどのような役割を果たすべきなのかを各地実践から共有し構築する。

漁業 (石油・天然ガス関係者の利害が明らかに異なることを考慮し、漁業コミュニティ、影響を受ける沿岸の地方自治体、そしてブルーエコノミー) の活動家たちは、漁業資源に大きく依存する人々のしなやかさやしぶとを結果として強化するよう求められている。

これらの資源はしばしば乱獲され、取り尽くされ、資源の枯渇を招きますが、それは伝統的な漁業の分野でよく強く感じられます。

伝統的な漁業と工業漁業により直面する問題をどのように解決し適切な緩和策を模索するダイナミズムをどう確立すればいいのか？

持続可能な連帯のブルーエコノミーの包括的なカバナンスのため、包摂的で持続可能な「言い成長」の観点から、観光、漁業、エネルギー、農業、運輸などの部門において直接・間接の連帯と人間らしい仕事を生み出すことができるかを考察する。

サブテーマ

2-1 / 伝統的な漁業の保護

2-2 / 永続的な新しい「青い仕事」の創出と環境保護

2-3 / ブルーエコノミー活動家たちにとっての社会保護制度

テーマ3 / 地域、食料自給そのカバナンスのための協働的で持続可能な「グリーン」経済

(略) 過剰生産、過剰消費の社会と飢餓とをどうやって調和させるか？

「グローバル・カバナンス」が存在しない中で、グリーン経済、コミュニティの自給自足、地球の保全に共通する利益をどのように確保すること。

グリーン経済に向けての変化の運用段階に移行することを最終的に可能にするのには、どのような制度的メカニズムなのかを考察する。

サブテーマ

3-1 / 生態系と共生する農業システム

3-2 / 食糧安全保障と主権

3-3 / グリーン経済、コミュニティの自給自足、環境保全のカバナンス



関西でも 2023 春闘始まる

『賃上げしかない！ 物価高と闘う 23 春闘集会』

MU・KANSAI NEWS より

◆2月26日 (日) 午後2時からPLP会館で開催された、なかまユニオン主催の『賃上げしかない！ 物価高と闘う 23春闘集会』に、コミュニティユニオン関西ネットワーク (CU 関西ネット) に結集する私たち管理職ユニオン・関西 (MU 関西) や他の友好労組の仲間も参加 (オンライン併用) して、いよいよ23春闘が開始されました。

各組合の取組み報告に先立ち、この日は龍谷大学の脇田滋名教授が『ストライキで闘う世界の労働者』と題して講演され、欧米の労働者がストライキを構えて賃上げや待遇改善の要求をする様子の紹介と解説をして頂きました。

イギリスのブレグジット (EU 離脱) は、労働者保護の規制が厳しい EU を出て、政府が労働組合の手足を縛ろうとする意図もあったのですが、それにも負けずに公共サービス部門の労働者が大規模なストライキで闘っています。労働組合をつくり難いと言われているアメリカで GAF A の中からも結成 (2023.3.4 Vol.3) 加入が増えています。日本の労働者・組合もストライキで闘わなくては！ というエールに満ちた講演でした。

MU 関西からも、集会当日現在スト決行中の職場で職安法 20 条・34 条を基にしてスト中の事業場の求人停止をさせる戦術について、皆さんと情報共有しました。集会の後は JR 天満駅前 - 天神橋筋商店街でティッシュ配布をして、労働組合に加入して賃上げを勝ち取ろうとアピールしました。MU 関西の仲間の各職場でも春闘要求 → 団交の取組みが始まっています。申入れや社前行動、団交等はお互いに協力し合って活動を豊かに展開しましょう。



大阪教室を協同会館アソシエに移し再スタートへ
友好各機関と連携し協働講座など新たな陣容で
大阪労働者学校 社員総会 / 3月11日

3月11日、大阪労働者学校 社員総会が開催された。

23年以降への同校運営について討議され、大阪教室を協同会館アソシエに移し新たに陣容を拡充し再スタートを切るなどが承認された。

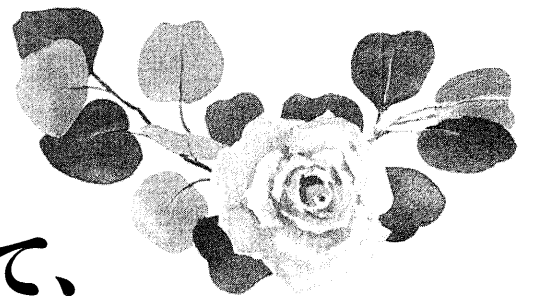
■ 協働講座の必要のある労働者、若者が集まれる土日の企画も検討できる。

・ 木下武男講師と相談して、業種別・職種別研究会と連携して労働講座の開設も検討する。

・ グローバル・ジャスティス研究会、地域アソシエーション研究会、唯物論研究会などと相談しジョイントの講座あるいは集会を検討する

・ 協同会館の地域ネットワークも利用して、住民参加の企画も検討できたらよい

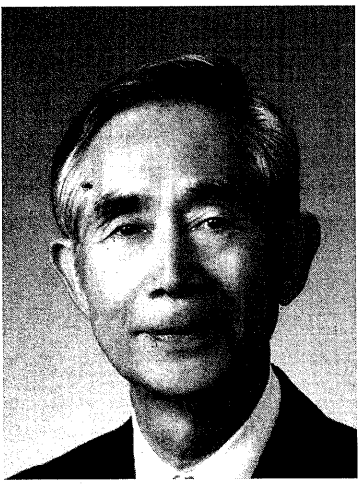
・ 沖繩講座も準備を進める。なお、学校所在地を西区学働館から協同会館アソシエ2階に移転登記することも確認された。



追悼 伊藤 誠 さん

わが国、マルクス経済学の泰斗にして、 社会主義をめざし、「大阪労働学校アソシエ」

創立へもご尽力



伊藤誠さんの追悼にあたって

2月7日、戦後日本で宇野理論を引き継いだマルクス経済学の第一人者である伊藤誠さんが逝去された。

1979年、マルクスの思想と理論の現代的再生・発展を基礎に、資本主義に対峙し新しい時代を拓く志を持った批判的知性の結集をめざし、いよいよ組織された『季刊クライン』が創刊された。伊藤さんはその編集委員会の中心を担われていた。

社会運動の活動家であった私が、伊藤さんと初めて出会ったのも、1980年代初頭の『クライン』の会合の席であった。以来、社会変革の新機軸の構築をめざして、10年ごとに『月刊フォーラム』、『アソシエ21』そして『変革のアソシエ』と名刺を変えながら継続された一連の批判的左派の連帯・結集をめざす雑誌の刊行と諸活動を、前半は事務局の一員として、2009年設立の『変革のアソシエ』の10年では共同代表と事務局長として、毎月一回は運営会議で顔を合わせ協議させていただいた。

特に忘れられないのは、1986年に日本の社会主義革命をめざす闘いにおいて緊急な課題の一つであった味方の四分五裂状態の克服のために、今は「きき尾五郎さん」と発足した建院協議会の「暫定綱領検討委員会」の作業に、理論家として「きき

いどもさん、降旗節雄さんと共に伊藤さんにも協力いただき、約2年余にわたって日本革命が打倒し、のこすべく日本資本主義の世界史的変遷を捉え、「いかなる革命か」について議論させていただいたことである。

もう一つは、「変革のアソシエ」の活動を次世代につながるため、労働運動の50周年事業と連携した「大阪労働学校アソシエ」創立へ、共同代表の伊藤さんが全面的に支持され、尽力いただいたことである。

前者は、「建院協議会」の日本革命をめざす我々の決意・綱領的認識の確立のために結果として、現在の『コモンズ』発行主体である『革命21』の綱領的認識の基礎に継承されている。後者の大阪労働学校アソシエは、当時の変革のアソシエ共同代表の一人であった本山美彦さんが初代学長となり発足し、現在も継続されている。

これらは、伊藤誠さんがマルクス経済学者として、社会主義をめざす途上において、貢献された皆さんの活動のほんの一端である。

ここに紹介させていただき、感謝を申し上げ、心からご冥福を祈りたいと思います。 『コモンズ』編集長 生田あい

伊藤先生を想う

本山美彦
(大阪労働学校アソシエ初代学長)

偉大な研究者であった伊藤誠先生の追悼など書くことには困難な作業である。そもそも伊藤先生が追悼文の類を望んでおられたか否かも不明である。

いきなり不敬な言葉を弄する失礼をお詫言する。私事で恐縮だが、最近私は「協同労働」が拓く社会主義的平和を指して『文真堂』2023年1月号を下さり載せて戴いた。

この書で、私は新しい人生を迎える決意をしている。拙書の完成によって私は過去を断つべく、自分の日記帳をすべて焼き捨てた。物心付いた頃から私は日記を毎日付けてきた。膨大な量の日記を焼き払うのは悲しかった。

その中で一つもあって、伊藤先生に関する正確な日時を確かめる術はない。この追悼文にあまりない日

付が抜けているのもそのせいである。お許しのほどぞ。

先生は、私が親しくしている若い研究者を、不思議に可愛がって下さった。何事にもキッパリと言いつつ、切らない私たちの共通点を感じて下さったのかと、私は受け取っている。

1980年代末、東大経済学部の主催で、当時の、いわゆる「近経派」とマル経派が富士山麓のある大会社の保養所で集い、シンポジウムが組織された。

著名な研究者に混じって私もそこに加えていたのだ。

驚いたことに、まず「マル経派」に発言させて、ほとんど東大に属する「近経派」の面々が疑問点を提出するという形が採られたことである。

この中身は単行本に盛り込まれている。まず別の考え方の人が

学ぼうという東大の先生方の大きさに感動した。

ある大先生が関西のマル経の超大物先生に、「先生は富士山、私とは八ツヶ岳とへりへりだったさびげなく出されたこの言葉に対して、関西の大物先生は言葉を出さず「領かれただけであつた。」

主なテーマは、当時、流行していた「平等交換論」であった。

キユーバ革命で砂糖の国際価格が米国政府の制裁によって暴落している時に、チェ・ゲバラがソ連に助けを求めたところ、ソ連側の返事は「国際価格でなら買おう」というものであったと、俗に言われていた「平等交換論」はこれで火が付き、

不等価交換論は従属論の一種であり、国単位での単線型発展モデルに対し、「先進国」の経済発展と「第三世界の低開発をセットにして

考えようとするものである。すなわち、第三世界の低開発は彼らを支配する先進国に原因があり、第三世界は「低開発の開放」を継続させられるだけである、という主張である。

ポール・バラン・アンドレ・フランクが唱え始めた人である。

伊藤先生もこの考え方に親近感をお持ちであった。

富士山麓のシンポジウムで私も、不平等な外国為替レート決定メカニズムを説明したが、数式の間違ひもあって、領いてくださった方々はいなかった。

しかし、その時の伊藤先生の発言は兎事であった。

(1) リカードは、土地の収穫減の恐れに十分気を付けていたから、メカニズムはポルトガルの数値を意図的に強調したのである。

(2) 国際価値論をマルクスの国内価値法則の修正でま

で言い切ってはならないだろう。

(3) 資本主義化した社会だけを経済理論の対象にするのはおかしい。資本主義以前の社会までも含む「世界経済論」が必要ではないか？

(4) 新リカード学派の技術格差による賃金水準不平等論は行き過ぎる傾向があるが、技術が一部多国籍企業によって囲われてしまっているという事実は確かに解明すべきである。

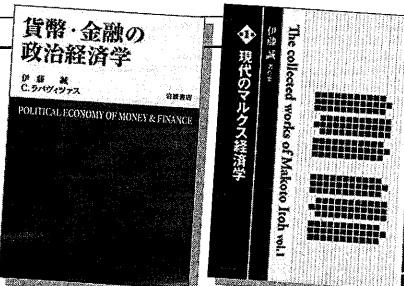
(5) 1990年代からインゲリスはオイルマネーと新規金融市場の開放によって経済成長したが、この傾向はその後、各国が追いついてきた。

(6) 労働する価値が生み出す喜びになる社会を経済学者たちは提示していかねばならない。

これらのご発言に伊藤先生の学問に向かう姿勢が鮮明に表れていた。

シンポジウムでの先生の数々のお言葉、私は、いまでも鮮明に覚えている。

伊藤誠(いとうまこと1936年4月20日生)東京大学名誉教授は、2月7日、急性心筋梗塞のためご逝去された。86歳 ●アソシエ21、変革のアソシエ共同代表 日本を代表する理論経済学者にして日本学士院会員 東京都出身 ◆マルクス経済学で宇野弘蔵、鈴木鴻一郎の後継者として宇野経済学の流れを汲む。氏はマルクス経済学内部で存在した資本主義分析を通じて社会主義への道を目指す正統派と称されるマルクス主義の流れと、原理論・段階論・現状分析に焦点を絞った宇野派の理論対立との取束に導いた。その象徴的存在として正統派との共同研究を精力的に展開し混迷する労働現場と社会に対して多くの活動と言動を展開されてこられた。



著書『信用と恐慌』(東京大学出版会)1973 『資本論研究の世界』(新評論)1977 『価値と資本の理論』(岩波書店)1981 『幻滅の資本主義』(大月書店)2006 『資本論』を読む講談社学術文庫2006 『サブプライムから世界恐慌へ 新自由主義の終焉とこれからの世界』(青土社)2009 『伊藤誠著作集』全6巻(社会評論社)2009-12 『日本経済はなぜ衰退したのか』平凡社新書2013 『経済学からなにを学ぶか その500年の歩み』平凡社新書2015 『マルクス経済学の方法と現代世界』桜井書店2016 『資本主義の限界とオルタナティブ』岩波書店2017 ほかに多数

声明
「G7反対」は私たちの
正当な意思表示であり、
「テロリズム」では
ありません!!

広島サミットの開催を控えて、昨年ごろから、警察などによるサミット警備、テロ対策名目の訓練や広報が目につくようになってきました。

こうした動きは、交通機関や自治体なども巻き込みながら、サミットに反対する主張や行動をあたかも「テロリズム」であるかのように印象づけ、一切の異論を認めない空気を醸成しかねないものになっていきます。

事実、首脳会合が開催される広島では、マツダが工場と本社休業、プロ野球も開催見合せ、広島市内宿泊施設には新規宿泊予約受付を停止の要請、会合当日の交通規制、平和記念公園への立ち入り規制やイベント自粛など規制措置が次々に出されておられ、戒厳令といったような状況になりかねない異様な事態になっていきます。

1月31日の第六管区海上保安本部による海上警備訓練がメディアでも報道されました。この訓練では、サミット会場付近の海域に抗議船が侵入し、「サミット中止しろ」というプラカードを掲げている模様が映像として映し出されました。(広島アテレビニュース1月31日、ほぼ同様のシチュエーションでの訓練について、NHKも2月12日に放送、結果的に、これらのニュースではプラカードで「サミット中止」を要求するような表現もテロリズムであるかのような警察の意図を肯定的に印象づける報道となつています。

こうした報道の模様から、私たちは、警察など法執行機関は「サミット中止」を主張するプラカードを掲げること自体を事実上「テロリズム」とみなし、取り締まりの対象としてると判断せざるをえません。これは、警察などの権力の濫用であり、明らかに言論表現の自由への敵対的な態度です。

(中略)

他方で、マスメディアは、警察などのテロ対策を理由とした活動が、憲法で保障されている言論・表現など市民的自由の権利を侵害しかねないことにも、もつと関心をもちべきです。そして、警察の報道だけでなく、反対や異論を提起する運動に対しても関心をもち取材する努力なしには、報道の公平性は保てません。報道機関ももつと市民的自由の権利への関心をもって欲しいと思います。以上。

2023年2月20日 G7広島サミットを問う市民のついで実行委員会 問い合わせ先
info-ng7@hiroshima2023.jp
https://www.jcaap.org/ng7/hiroshima/

